

書評

指 昭博著

『イギリス宗教改革の光と影

— メアリとエリザベスの時代 —』

(ミネルヴァ書房・2010年11月刊・A5判)
314頁・本体価格6,000円

仲 丸 英 起

本書は、我が国のイギリス史研究を常に先導し続けている著者が、自身の博士論文をもとにして再編したものである。やや意外な感もするが、本書は本格的な学術書としては著者初の単著でもある。周知の通り、著者はその幅広い学識によって西洋史学界全体に多大な貢献を果たしてきたわけであるが、本来の専門であるテューダー朝期イングランド宗教史研究が今回一冊にまとめられたことは、研究者・一般の読者双方にとって慶ばしいことである。

まずは本書の内容を簡単に紹介してみたい。序章では、メアリ期に関する研究史が扱われ、イギリス宗教改革史研究の中でメアリ時代を問い直す意義が明らかにされる。「反カトリック」意識や政策は、近世・近代イギリス史を形成する基軸となってきた。そのため、A・G・ディケンズに代表される伝統的なテューダー朝期の歴史観において、メアリ時代は「逸脱」「不毛」という評価を下されてきた。またこれを批判したP・コリンソンらの修正論も、研究対象はヘンリ8世期とエリザベス期に集中していた。本書の目的はメアリ時代を中心に宗教改革を中央における政府の施策（「上から」）と地方における教区への対応（「下から」）という双方の視点で捉えなおし、さらにこれをエリザベス時代との時系列的な変化の中で意義づけることであると謳われる。

本論は、2部から構成されている。第I部では、メアリ時代の宗教問題が主として「上から」の視点で検討される。第一章では、メアリの生涯を縦軸にテューダー朝中期の展開が概観され、メアリのカトリック信仰という宗教問題が諸事件の原因・結果として作用していたことが指摘される。第二章では、トマス・ワイアットの乱が検討され、この反乱が失敗した言説上の要因の検証を経て、同時代のイングランドが宗教的に極めて不安定であった状況が提示される。第三章では、メアリ期の出版とプロパガンダが組上に載せられ、メアリが出版統制に失敗したという通説に反駁が加えられる。第四章では、メア

リ時代の教会政策を主として担ったガードナー、ボナー、プールの三人を中心に、政府側がプロテスタントをどの程度取り締まり、またカトリック教会をどのように再建しようとしたのかが通観される。

第II部では、第I部で論じられた中央における宗教政策の転換が「下から」の視点で検討され、教区教会が被った影響の様態が描き出される。第五章では、巡察記録などを手がかりに、教会財産と俗人の態度という面から教区教会に生じた変化が考察される。第六章では、妻帯聖職者からの聖職録剥奪についての問題が考察され、この政策が教会の権威を自己を低下させていった経過が明らかにされる。第七章では、聖職者全体の動向が概観され、宗教改革を通じて高い社会階層の者たちから構成される比較的均質な社会集団へと聖職者が変質していった状況が示される。第八章では、14世紀後半以降に開始されたとされる聖史劇、とりわけヨークにおけるその盛衰を通じて、宗教と都市文化の関係が探求される。

終章では、本書全体の総括が行われる。I部・II部の検討を踏まえ、カトリックに復帰したメアリ時代を検討することは、宗教改革の実態、イングランドにおけるプロテスタンティズムの位置づけ、エリザベス時代の評価にかかわる重要な問題をはらんでいると主張される。しかしメアリ時代の評価を単純に反転させるだけではこれまでの議論の陥穽に再び陥るだけであり、メアリが目指した理想とその前に立ちはだかった障害とを確認した上で、その歴史的な意義を考える必要があると結ばれる。

本書は、メアリ期を扱った初の邦語による本格的な研究書であり、その事実だけでも大きな重要性を持つものである。著者も指摘しているように、テューダー朝国王の中でヘンリ8世とエリザベスのプレゼンスは一般的にもアカデミズムにおいても高く、エドワードとメアリの短期間の治世は単なる幕間として処理される傾向が強い。特にカトリック復帰政策を採ったメアリ治世は、軽視されるか否定的な評価を与えられるかのいずれかであり、日本でも「ブラッディ・メアリ」というカクテルの名と共に負のイメージが流布してしまっている。その「影」は、エリザベスという「光」があまりにも日映いたために、一層その暗さが際立っている。しかしアナクロニズムにもとづく偏見に満ちた評価と、史料に依拠した実証的作業を経た後での功罪の判断とが、歴史学における議論の質を高める面で全く異なるのは明らかであり、後者の立場が貫徹されている点で本書には著者

の研究者としての誠実性が如実に表れているといえるだろう。

同様のことは、本書で採用されている研究方法にも当てはまる。宗教史研究においては、ややもすると研究者の信仰が研究対象に仮託され、信仰告白としての歴史像が形成されてしまう場合が存在する。ディケンズらの伝統的歴史観とコリンソンらの修正論との対話は水掛け論のような状況に陥っているが、その立場の相違には両者の信仰が照応していることがたびたび指摘されている。著者は、全体の傾向を示す統計的史料と裁判記録などの個別史料とを総合する手法を用いて主張の蓋然性を高め、恣意的な史料選択を行う危険性を巧みに回避している。そしてメアリの統治が一概に失敗とはいえず、政府は現実に即して効果的であると考えられた宗教政策を実施しようとしたこと、それにもかかわらず社会的・経済的な問題に阻まれて十分な成果が上がらないままメアリが没してしまったことを明らかにしている。このように、本書は単にメアリ期を正面から取りあげたと言うだけでなく、通説にも修正論にも全面的には与さない冷静な立場をとることによって、同時代の政治・社会状況に実態的に迫ることに成功したといえるだろう。

以下では、評者の気になった点および要望について述べてみたい。第一に、紙幅の問題もあると思われるが、本書全体を通じての構造がアンバランスなように感じられる。本書の第Ⅰ部では基本的にメアリ期が上からの視点で分析されるのに対し、第Ⅱ部ではかなりの紙幅がエリザベス期に割かれている。もちろん、メアリの時代を考える上でエリザベスの時代が意識されるのは当然であり、そのために「メアリとエリザベスの時代」という副題が付けられていると思われる。しかし序章や第一章でエリザベス期の宗教史に関する概観や研究史の整理が行われていないので、専門の研究者以外にはやや不親切な印象が否めなかった。ただしこの点は本書では割愛せざるを得なかったエリザベス期を扱った著作の刊行が予定されているとのことなので、同書によって補完されることを期待したい。

第二に、第八章に対する違和感が挙げられる。著者はとりわけ第五章および第六章において、メアリのカトリック復帰政策に対する教区教会ないし聖職者の全般的な従順さもしくは即応性を指摘している。それに対して第八章で描かれるヨークの聖史劇をめぐる事例では、このカトリック的な劇についての人々

の執着が指摘されている。K・トマスが述べているように、中世まで大多数の人々にとって宗教が生活の儀式的手段であったのは確かである。しかし、日常的に通う教会調度品の変更にさほど抵抗を示さない程度に宗教と距離を取り始めていた人々が、なぜ聖史劇の存続にはかように固執したのか。北部でカトリック色の強いヨークという地域的特殊性のためであるのか、それとも信仰とは関わりなく都市における祝祭が同時代の人々に有していた影響力はそれほどまでに強かったということなのか。その他の可能性も含めて大きな論点に発展する問題であると思われるので、前章までとの関連を明らかにしていただければと感じた。

最後は評者の関心からの要望となってしまうのだが、教会行政と地方統治との関係についてもご教示願えればと感じた。よく知られているように、テューダー朝政府は在地貴族から土着ジェントリへと地方統治権の受託者を移行させることによって、緩やかな中央集権化を試みていた。このプロセスはヘンリ8世期に宗教面の改革と同時並行的に進められ、その後エリザベス期に引き継がれたとされるのが一般的であるが、この間の状況に関する研究は数少ない。カトリックへの復帰政策はこうした統治改革を阻害したのか、それともさほど影響を与えなかったのか。具体的には、治安判事の選任にあたり信仰の問題はどの程度の重要性を有したのか。また下院議員の選出にあたり候補者の信仰は選挙区内でどのように受けとめられ、パトロンとの紐帯をどれほど強化・弱化したのか。さらにエリザベス期への人的連続性はどの程度認められるのか。こうした点が解明されることによって、国家形成における宗教改革のインパクトはさらに明確化されるであろう。

評者は宗教史を専門とする者ではないため、内容の理解不足や的外れな指摘もあるかと思われるが、ご寛恕願えれば幸いである。いずれにしても、本書で輪郭を与えられた宗教改革史像が、イングランドに留まらない重要な視点を提供しているのは確かである。本書がきっかけとなり、ヨーロッパ近世における宗教と社会の関係をめぐる議論が活発化することを期待したい。

(慶應義塾大学非常勤講師)